

# 旭川家具における北海道産広葉樹の利用促進に向けて 北海道産広葉樹利用促進研究会の活動から

2022年11月、旭川林産協同組合の高橋理事長および旭川家具工業協同組合の藤田理事長の呼びかけにより「北海道産広葉樹利用促進研究会（以下、研究会）」が発足しました。そこから2023年12月までの間に開催された延べ12回の研究会・研究会内に設けられた分科会などにおいて、北海道産広葉樹をキーワードとする多様な情報交換が行われ、道産広葉樹材を活用するための方向性がまとめられました。そこで、研究会の事務局を担い、研究会の運営および資料の取りまとめを行われた旭川市工芸センターのご了解をいただき、研究会の目的や実施内容について紹介します。（文責：普及協会・菊地）

## ■研究会の概要

研究会の構成を表1に、研究会立ち上げの背景と目的を表2に示します。第1回研究会での「旭川家具工業協同組合が自分たちの将来の需要量を予測し、旭川林産協同組合に一定量を仕入れておいてもらうという流れをつくっていきたい」という説明に、研究会の出口が集約されているように思います。

表1 研究会の構成

旭川林産協同組合、旭川家具工業協同組合  
道総研林産試験場、旭川市工芸センター  
\*他、オブザーバー等

表2 研究会立ち上げの背景と目的

ウッドショックに端を発する木材価格の高騰により、旭川家具業界においても材料確保が困難となっている。解決策のひとつとして道産材の更なる活用が想定されるが、全国的な木材需要の高まりにより、道産材も価格高騰・品薄の状態となってきた。このため、ナラやタモ、イタヤカエデ等の従来材に樹種を限らず、より広範な道産材の利用を促進していく必要がある。

こうした材を利用することにより旭川家具の安定的な製造・供給を図ることを目的に、地域の木材関係団体からなる研究会を発足し、道産材の更なる利用促進に向けた具体的な研究や課題解決等を行う。

研究会の活動内容を表3に示します

表3 研究会の活動内容

- 1) 資源量の把握（一定の供給量を確保できる樹種の選定）
- 2) 樹種強度の把握（材料強度試験，製品強度試験）
- 3) 家具材として利用可能な樹種候補の選出
- 4) 家具業界としての需要量予測

なお、表3に示された項目に関わらず、研究機関からの話題提供、銘木市の見学など、多様な情報提供・意見交換も行われました。

表3の活動内容の中から、1)、3)について研究会での検討結果を示します。

## ■広葉樹資源量の把握

広葉樹は森林台帳では「広葉樹」と一括りにされていて、樹種別資源量を正確に把握することができません。そこで、研究会では旭川林産協同組合が主催する「北海道産銘木市」での樹種別取引量割合を便宜的に「山の樹種構成割合」と見なすことにして、2013年度から2021年度までの9年間の樹種別取引量が整理されました。この9年間の総取引量は160,080m<sup>3</sup>、その樹種別割合は表4のとおりです。取引量割合が全体の2%以上あるのは9樹種で、次いで、クルミ（1.7%）、ホホ・マカバ（各1.2%）となっています。

表4 銘木市での樹種別取引量割合

樹種	割合 <sup>1)</sup> (%)	樹種	割合 <sup>1)</sup> (%)
ナラ	27.0	イタヤカエデ	3.5
メジロカバ	12.8	ザツカバ	3.0
タモ <sup>2)</sup>	11.0	ニレ	2.5
セン	6.5	カツラ	2.3
シナ	4.6		

注) 上記以外の樹種は2.0%以下

- 1) 9年間の総取引量を100%としたときの割合
- 2) ロシア材（年間200~400m<sup>3</sup>）を含む

## ■利用の現状と利用可能な樹種候補の選出

旭川市工芸センターでは、旭川家具業界での道産材の利用状況を調査しています（表5）。事業所43社の令和2年度無垢材購入量は3,337m<sup>3</sup>で、このうち道産材の占める割合は約38%となっています。

表5 無垢材の購入量

樹種	購入量(m <sup>3</sup> )
ナラ・ホホワイトオーク	1,205
ウォルナット	628
タモ・アッシュ	391
イタヤ・メープル	168
その他広葉樹類*	542
針葉樹類	133
その他（樹種不明等）	270
計	3,337

\*: サクラ・チェリー、カバ、ブナ・ビーチ、クルミ、ポプラなど  
木製家具製造業実態調査（旭川市工芸センター）令和2年度実績（事業所数43）

旭川家具工業協同組合では北海道産材の活用を推進する「この木の家具・北海道プロジェクト」を2014年から進めています。2014年には26.9%であった道産材比率は、2020年に43.0%（表6）、2022年には57.5%となっています。樹種ではナラ系が1/3を占めています。

表4～表6などを参考に、広葉樹11樹種の材料強度試験、5樹種の製品（椅子）強度試験が旭川市工芸センターで行われました。それらに基づき、活用を進めていく樹種の候補が選定されました（表7）。

広葉樹は原木仕入れから用材として販売するまでに約2年を要します。このことから、家具メーカーが2年先を見越した需要量を予測し、製材事

業者が原木を仕入れるフロー（図1）がまとめられました。今後、この調達方法に沿い、候補樹種を活用した製品化が進められる見込みです。

表6 旭川家具での北海道産広葉樹の使用状況（2020年度）

樹種	全使用量(m <sup>3</sup> )	内訳(m <sup>3</sup> )	
		道産材	輸入材
ナラ系	747	445	302
タモ系	296	227	69
カバ系	92	91	1
その他	1,006	158	849
計	2,141	921	1,221
道産材率		43.0%	

旭川家具工業協同組合の事業者22社の回答

\*: 小数点以下の取り扱いにより、全使用量と内訳の合計との間に若干の差が生じている

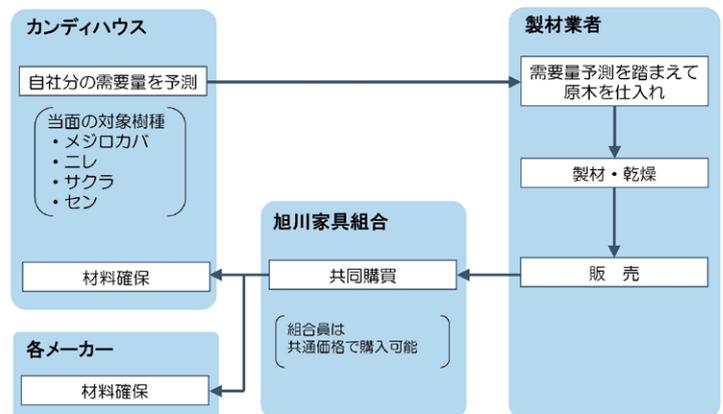


図1 新たな材料の活用に向けた調達方法

## 謝辞

本稿の作成に際しては、旭川市工芸センターのご協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

表7 活用を進めていく樹種候補

樹種	材料強度	流通量	特徴
メジロカバ	高め	多め	・材料強度が高く流通量も多い。 ・製品強度が弱い傾向にあるので、形状や接着剤等の工夫が必要か。
ニレ	↑ ↓	やや少なめ	・はっきりしたきれいな木目。 ・北海道が主産地であり、ブランド化しやすい。
サクラ		少なめ	・上品で落ち着いたはだ目。 ・流通量は少なめ。
セン	低め	やや多め	・白っぽい上品なはだ目。 ・北海道に良材が多く、ブランド化しやすい。 ・材料強度は低め。テーブル天板などへの使用が適当か。